

それぞれの小学校や中学校では、授業改善に取り組んでいる。授業を改善しましょうと言っても、授業が変わっていくわけでもない。個人任せになってしまう。そこで、各学校ごとに、研究主題や副主題を掲げ、みんなで授業を改善していこうという気運を盛り上げている。いわゆる研究である。教員は、研究と修養に努めなければならない。したがって、やるのが当たり前であって、特別なことではない。ただし、やり方には改善を要するのも事実である。

3年前に野田中学校に来た。先生方に授業を改善してもらうために、どのようなアプローチがいかと考えていた。ところが、福島市教育委員会より、野田小学校が研究委託校となり、野田中学校は研究協力校になりましたとの話があった。内容は、読解力向上である。具体的には、リーディングスキルである。あっけなく、研究すなわち授業改善の方向性が決まってしまった。

幸いにも、リーディングスキルのことは知っていた。だから、何となくイメージはわいた。だが、どんな授業をすればいいのかというプランが浮かばなかった。そこで、慌てて2冊の本を読んだ。新井紀子先生の「A I vs.教科書が読めない子どもたち」と「A I に負けない子どもを育てる」である。前者は表紙が白いので白本、後者は赤い表紙なので赤本と勝手に呼んでいる。リーディングスキルのバイブルである。

2冊を読むのに、それほどの時間はかからない。どの先生方にも読んでほしい。しかし、読んだ方がいいですよと勧めたところで、どのくらいの先生方が読んでくれるだろうか。野田中学校には、白本、赤本、それぞれ3冊ずつある。

読めば、なぜリーディングスキルなのかという背景や経緯がわかる。読解力の話だから、新井紀子先生は、その分野の方なのかと思われているかもしれない。ところが、数学者なのである。数学の専門家である。その方が、読解力向上と言っている。そういえば、同じ数学者の藤原正彦先生が、「一に国語、二に国語、三四がなく、五に算数」と言っている。

なぜやるのかという背景や経緯が分からないとやらされ感をもつようになる。そうなると、事はうまく進まなくなる。成果も上がらない。すなわち、授業が改善していかない。逆に、背景や経緯が分かり、なるほどとなれば、使命感が湧いてくる。それが授業改善に向けてのエネルギーになる。

それぞれの先生方が、各自で取り組むのもわるくはない。だが、学校全体で、すべての先生方で取り組むことで、大きな流れがうねりとなり、授業が変わっていく。そして、子どもたちが変わっていく。子どもたちに力をつけることができる。それが、理想である。

野田中学校は、リーディングスキルとともに3年目を迎えている。定着してきたこともあれば、まだまだのところもある。次年度へ向けて、何を継続して、どんなことを新たに進めるのか、そのプランを考えていこうと思う。